
モルヒネ

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モルヒネ

【Nコード】

N2688Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

その日の同窓会は遅れて出席することになった。一次会が終わり解散する雰囲気の中、俺は彼女を飲みに誘った。

「それじゃ、乾杯」

「ああ、乾杯」

チン、とチューハイの入ったグラスが鳴る。浜田は着が到着するの
も待たずに一気にあおり、ぷはーっとやけに男らしく息を吐く。

「浜田、酒強いのな」

「何言ってるの。まだ一杯目でしょ？」

「この店では、な。俺が見ただけでも十杯以上は飲んでただろ」

「そうだっけ？ まあ、飲み放題の度数低いお酒じゃ酔う前にお腹
いっぱいになるっしょ、ふつう」

「ザルめ。お前のせいで山田が帰ったって聞いたぞ」

「あれは私の所為じゃないのー。あの子が下戸過ぎただけ」

「どうだか」

呆れて嘆息。レモンチューハイを口に含む。上手くはないが不味
くもない。正直に言ってあまりアルコールに強くない俺はこれでも
何杯か飲めば十分酔える。というか昔の冒険で大火傷したせいであ
まり強い酒は飲めなかつたりする。

「朝比奈っち、一口ちよーだい」

「欲しかったら勝手に頼め。どうせ俺の奢りだ」

「うえっ、まぢ？」

「なんだその心底意外そうな顔は。誘ったのは俺なんだ、金ぐらい
出すさ」

「さっすが貯金百万の男だ！ あっばれ！」

「いつの話だよ。もうその十倍はあるっての」

「うえっ！？ 警察ってそんな儲かるのかっ！」

「お前らの大半は社会人一年目だからな、基本給違って当然だろ」
「ついでに言えば俺は女も酒もギャンブルも車もやらない。そりゃ
金も貯まるに決まってるだろう。」

「なんか朝比奈つちに後光が……」

「そんな大げさなもんじゃないだろ。十年もすりゃ立場逆転してるだろうよ」

やけに感心する浜田の勘違いを訂正してやる。俺はキャリア組じゃないから滅多な事がない限り高給取りと言える役職に就くことなど出来ない。今の給料が安いかと言えば決してそんなことはないのだが、浜田のように一流企業に採用されたヤツと比べればやはり劣る。十年どころか五年もしないうちに浜田が奢る側になるかもしれない。

「それに今日も色々あつて遅れたしな。金はあつても自由はないよ」
ぐいつとチューハイを飲みほしてグラスをテーブルに置く。「いい飲みっぷりー」と浜田が手を叩く。軽やかに揺れる栗色の髪、快活な笑顔、少しハスキーっぽい声。誘ったのが浜田で良かったとほんの少しだけ思った。

「よーしよし、んじゃ追加のお酒たのもーか。私、スピリタス！」
「んなもんがただの居酒屋にあつてたまるか」

度数96を誇るポーランド原産の『最強の酒』。洋酒専門、あるいは大型の店ならまだしも、こんなカウンター席が十席あるかないかのこじんまりとした個人経営の店にあるはずがない。

「おっちゃん、スピリタスをストレートで！」

「あいよ」

「……あるのかよ。しかもストレートって」

しかもなんか慣れてる。どんだけ酒強いんだよ、浜田。アレは原液で飲むもんじゃない。消毒だつてできちゃう素敵仕様なんだぞ。

「朝比奈つちもいつとく？」

「無茶言つな。俺はチューハイで十分なんだ。すいません、レモンもっ一杯下さい」

「あいよ」

目をキラキラさせる浜田を牽制。サービスのキャベツを摘まんでいるうちに追加の酒と焼き鳥の盛り合わせがやってくる。

「んじゃ、乾杯」

「またかよ」

小さいグラスをかける浜田。仕方なく合わせてやる。

「んー、しびれるーっ」

「そりゃよかつたな」

「朝比奈つちも一口、」

「いらん」

「つれないなー、もあ」

膨れる浜田を尻目に俺はどんどん焼き鳥を消化していく。一次会に到着したのがかなり遅かったので腹が減っているのだ。

「そついえばさ」

「ん??」

俺が焼き鳥を平らげたところで不意に真面目な声で浜田が言った。手には二杯目のスピリタス。なんか目が据わってる気がしないでもない。

「今日、なんかあったの? 元気ないけど」

「……鋭いな、浜田は」

「そうかな。私は朝比奈つちの方が言いたそうにしてるから分かっただけだと思うけど。多分だけどさ、何か辛いことがあつて誰かに甘えたかつたんでしょ? だから同窓会の後に私を誘った。違う?」

「参ったな。ホントに鋭いじゃないか、愛^{まな}」

「愛ときましたか。これはホテル地下のバーで聞いた方がいい雰囲気だった?」

挑発するように意地の悪い笑みを浮かべる浜田。酔っているのだから、やけに顔が赤い。

「場所がどこだろうと聞いて気持ちいい話じゃないぞ」

「でも言いたいんでしょ、朝比奈つち レンは。捨てられた子犬みたいな顔してさ」

俺は本当にそんな貌をしているのだろうか。ここ数年で随分とタフになったつもりだったけれど、優柔不断で偽善的な俺の性格は何

一つ変化していないのかもしれない。

「投身自殺」

「それが今日遅れた理由？」

「ああ。遺書もあつて一見事件性は皆無だったんだけど……そういったのがな、握ってたんだよ」

「握ってた？」

「ああ。チャック付きのビニール袋つてあるだろ？ ジップロックつて言うのか？ まあそんなやつ。その中に電話番号が書かれたメモ用紙が一枚入つてて、それを遺体が握ってたんだ」

「いきなりきな臭くなつたね」

「まあな。他殺の線が出て来たから現場の連中も大慌てさ。んで、例の電話番号を調べてみると……驚くことに身内だったわけだ」

「身内つて、被害者の家族が犯人だったつてこと？」

「主語が違う。メモ用紙に書かれた電話番号の携帯電話を持っていたのは調べた人間の身内……要は警察内にいたつてことだよ」

俺の言葉に浜田が息を飲む。俺はチューハイをあおり、一旦会話を中断　　余裕を失い少し怯えた様子の浜田をじっくりと眺める。

「やつぱ止めとくか？」

「う……き、聞く。中途半端は逆に怖いし」

簡単に強がりだと分かる。昔から飄々としているようでいてその実誰よりも怖がりだった彼女の性格を思い出し、苦笑。少し意地悪をし過ぎたかもしれない。

「実を言つとな、これが例の番号を持つ携帯電話なわけだけど」
懐から取り出したのを見せてやる。浜田は明らかに怪訝な表情を示した。

「これ、レンの電話でしょ？」

「ああ。そのせいで今日は遅れた」

「え？」

「俺の携帯番号だったんだよ。メモに書いてあったの」

浜田の顔から表情がなくなる。が、それも一瞬のことで、すぐに恐怖と悲哀を足して割ったような微妙な表情で俺を見つめる。

「おい、愛。お前、絶対何か勘違いしてるだろ」

もうそろそろ潮時と判断し、浜田の勘違いを正してやることにする。

「勘違いって、なにがよ」

「俺、犯人じゃないから。というか、結果的に警察の見解では自殺。犯人なんていない」

「は……？」

「おつ、アホ面」

「レンっ！」

「怒んなよ。言ったじゃないか『聞いて気持ちいい話じゃない』ってな」

「アンタね……」

「おうおう、ようやく地が出て来たじゃないか」

「うっさい！ 私の心配返せこのバカ！」

そんなこんなで。他の客がいないのをいいことに二時間ほど大騒ぎした後、俺と浜田は店を後にした。浜田の暴走により普通の居酒屋で飲んだ金額とは思えない額になっていたのだが、まあそれはいいとして。

「レン……」

「あんま喋るな。また吐くぞ」

「うう……不覚」

ふらふらと足元の覚束ない浜田を支えてやりながらタクシーが拾えそうなところまで歩いていく。俺も素面というわけではないが、酔ったヤツを相手にするにはやはりかなりの労力がある。

「ねえ、レン」

しばらく歩いて、少し酔いの醒めた様子の浜田が足を止めた。こいつのアルコール分解酵素の異常さはこの際おいておくとして、呼ばれたからには返事せねばなるまい。

「なんだよ。トイレか」
「うわー……エチケツトない男ってこれだから」
「そんなもん酔っ払いに適用するか。トイレじゃないならなんだ。はつきり言わんと分かんぞ」
「んーとね、さっきの続き。ちょっと落ち着いて話したい。勿論、二人つきりで」

落ち着いて二人きりで話せる場所 そんなものは必然的に
宿泊施設になるわけで。どうせ明日は休日だ。今からタクシー拾って帰るのもホテルに一泊するのも大差ないということで、お互い合意して手近なホテルに入った。の。だが。

「上がったよー。レンも入ってくれば？」
栗色の柔らかな髪を指先で弄りながら浜田がバスルームから出てくる。古来から女性の最も魅力的な姿は湯上りだというのが……いや。なんとうか。不覚。

「とうか服着ろ」
「どうせ脱がすならバスタオルだけでもいいじゃんかー」
「誰が脱がすかつ！ だいたい俺とお前は」
「七年前に終わった、でしょ？ 分かってるってば」
くすくす笑う浜田。一方の俺は浜田の姿を直視できないでいる。完全にペースを握られてしまった。

「相変わらずレンは初心だよー。まさかアレから彼女出来てないってこともないだろーに」

「……悪かったな、できてなくて」
「うえ……なんか、ごめん」

「そこで謝られるとダメージが軽く三倍（当社比）なんだが」
あと「うえ」とかマジへこむから止めて欲しい。

「ま、まあ、そんなことよりも話の続きですよ、レンさん！」
「続きも何も、あれで全部終わりだよ。犯人扱いされて腹立ったっただけの話だ」

「へえ……“話しの続き”ってだけでその話だつてよく分かったね」
……嵌められた。浜田は一言も話の内容を特定する修飾を付けて
いなかったのに俺が勝手に投身自殺の話だと決めつけてしまった。
「普通、話の続きって言ったら直前の話とかだよな？ 投身自殺の
話は割と最初の方だったのにどうしてレンは私はその話をしたがつ
てるって分かったのかな？」

ぐいっと身を寄せてくる浜田。顔は笑っているが、目は真剣その
もので、その真摯さがやけに胸に響く。

「……分かった。降参だ。ちゃんと全部話すからそれ以上近づくな
服を着るせめてベッドに潜り込むなりして露出を抑えろ」

「抱きついていい？」

「殴るぞ」

「うえ……目がマジだよお」

「お前ももう大人なら節度ぐらい身につけろ」

「その言い方だと私が見境ないみたい聞こえるけど」

「実際そうたる」

「……鈍感」

「あ？」

「さあ、据え膳だぞ！ 男なら度胸見せるバカヤロー！」

ベッドに潜り込み何故か挑戦的な視線を向けてくる浜田。意味が
分からんが布団被ってくれたおかげで露出は減った。一安心。

「さて、人心地ついたところで話の続きだ。今度こそ胸糞悪くなる
かもだが、いいな？」

「うえ……ここで人心地ついちゃうんだ、この人」

「なんだよ、文句あんのか」

「別に。彼女の代わりに彼氏がいたんじゃないかとか思ってないよ
全然全く」

「？ 文句ないなら続けるけど、一応守秘義務とかあるから他言無
用で頼むぞ」

「はいはい」

なんか投げやりな浜田。もしかすると酔いがぶり返したのかも
れない。よくわからないが。

「じゃ、まずは俺の携帯番号がメモに書かれてた理由からだ。これ
は憶測の域を出ないからあんまり口にしたくないけど、多分俺に自
分の死を知らせるためにとった行動だと考えられる。というか、そ
れ以外に理由は思い浮かばない」

「犯人を示すメッセージの可能性は？ 実際にはレンは犯人に疑われ
て事情聴取とかされて飲み会に遅れたんじゃない？」

「まあ、事情聴取されたにはされたが、別に最初から犯人だなんて
思われてなかったけどな。幸い仕事だったからアリバイはあつた
し、直筆の遺書の存在、わざわざ密封タイプのビニール袋に入れる
なんて不自然さなんかからせいぜい重要参考人程度の扱いだったよ」
「ちよつと待って。ビニール袋に入れるのが不自然ってというのは？」

「投身自殺、って言ったる？ もし仮に誰かに突き落とされて殺さ
れたとするならば、事前に自分が殺されることを予期してメモに電
話番号を書くこと自体はまだ許容の範囲内だ。けど、わざわざ密封
式のビニール袋に入れる余裕が今から殺されるって人間にあると思
うか？」

「あ、そうか……前もって準備できるなら汚れて見えなくならない
ようにって考えることも出来るけど、殺意を持つ誰かに追いかけら
れている状況ならそんなことしている暇があるならまず逃げようと
するのが普通だし……そもそも電話番号じゃなくて犯人の名前を書
くはずよね」

「名前・電話番号に関してはどちらか一方の情報しか知らない可能
性もあるから一概には言えないけどな。ま、なんにしても俺が犯人
である可能性は状況的に皆無だし、そしたらあのメッセージは俺に
自分の死を知って欲しいと解釈する他ないだろう」

と、そこまで言ったところで浜田はようやくこれが俺にとってど
ういう事件だったのか思い至ったのだろう、悲痛な表情を浮かべて
目を閉じた。

「知り合い、だったんだね……」

「まあな」

見知った人間のぐちゃぐちゃになった死体を見て来たから。それも、その死を第一に俺に知らせたいと思ってくれるような相手の死体だ。そりゃ空元気も出来なくなる。

「誰か聞いてもいい……？」

「聞かない方がお前の為だ」

「それは……私も知ってる人ってこと？」

迂闊だった。ニュースでも見ればすぐにも分かることではあるが、今、この場で浜田にその名前を告げるのは些か残酷過ぎるだろう。けど、言わなければきつとこいつは納得しないだろう。だから「元カノってやつだよ。両親に先立たれて、生きるために危ない仕事に手を出した拳句薬漬けにされて、それでも自我が残ってるうちに死んだ憐れなヤツだ。俺と付き合ってたのだったと前なのに。本当に天涯孤独ってのだったんだろうよ。俺が携帯番号変えるかもなんてもう考える余裕もなかったんだろうな、あのバカ」
せめてもう少し綺麗な死に方を選べなかったのだろうか。記憶に残るならもつと綺麗な、あの頃のような笑顔がよかった。

「う……あ………」

浜田は泣いていた。彼女の名前に思い至ったのだろう、小さくその名前を呼びながら「ごめんなさいごめんなさい」と泣きじゃくる。「悪い。やっぱりお前に話すことじゃなかった。ごめん、愛」

後か先か。たったそれだけの違いだ。俺が最後に好きになったのが浜田愛で、その前があの子だっただけのことなのに浜田は全ての責任が自分にあるかのように己を責める。その責任はもう七年前にとっっているにも関わらず、浜田は……。

「大丈夫。あいつはお前を恨んじやないよ。恨むとしたらきつと俺だけだ」

そう。形はどうあれあの子を捨てたのは他ならぬ俺なのだから。

「なあ、愛。もし、お前が良かったらだけ……」

過去の確執は今こそ消えた。元から俺達は相思相愛……それはどうやら今も変わっていないようだし、そうでなければ危険な橋を渡った甲斐がない。

「せめてお前の痛みがなくなるまで傍に居させてくれ。なあ、愛。

お前の痛みを俺に

「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2688y/>

モルヒネ

2011年11月6日03時07分発行